

## 国内経済情勢

### 概 観

国内需要は、公共事業の需要効果浸透が続き、消費も緩やかな拡大傾向を維持するなど底固い推移をたどっており、このような状況下9月の生産・出荷は前月に続き増加を示した。9月の輸出数量は特殊要因もあって前年比微増となったが、ならしてみると円高の影響から輸出数量の減少基調が続いており、これを主因として7～9月の生産・出荷は前期比微増にとどまっている。なお企業の生産態度は素材産業を中心に総じて慎重であり、製品在庫は5月以降5か月連続して減少している。雇用面の動きをみると、有効求人倍率は緩やかな回復を続けているものの、9月の失業率が再び上昇を示すなど、はかばかしい改善はみられない。

10月の商品市況は、円高に伴う輸入原材料コストの低下を背景に軟化を示す品目もみられたが、大方の品目では生産抑制の持続や海外市況の上伸から総じて底固い動きを示した。一方卸売物価は10月に入ってから電力、ガス料金の引下げ等から低下を続け、消費者物価も前年比+4%前後の落ち着いた基調を継続している。

金融面をみると、7～9月のマネーサプライは前年比+12.1%と前四半期比やや伸びを高め、10月の銀行券平残も前年比伸び率が前月に比し上昇した。この間夏場以降軟調を続けてきた公社債市

況は10月にはやや持直しを示した。

9月の国際収支は、貿易収支・経常収支とも輸出の一時的増加などから黒字幅がやや拡大した。為替相場は10月下旬にかけて円高傾向を強めたため、更月後米国のドル防衛策の発表から円安に転じた。

#### 生産・出荷は前月に続き増加

9月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比\*、速報)、同出荷(速報)は、それぞれ+1.1%、+1.2%と前月(各+1.2%、+1.0%)に続き増加した(7～9月では生産・出荷ともに+0.4%)。この間、生産者製品在庫(速報)は、-0.4%と5か月連続して減少した。

\* 以下増減率は特に断わらない限り前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

生産・出荷動向を業種別・財別にみると、公共投資の順調な進捗を映じて土木関連財(セメント、鉄骨、ショベル系掘さく機など)や建築関連財(アルミサッシ・ドア、スチールシャッターなど)が生産・出荷とも引続き増加をみているほか、耐久消費財の生産も暖ちゅう房熱機器、電気洗たく機、エアコンを中心に前月に続き増加した。反面、生産財の生産は石油製品、板紙、紡績糸などの落込みを主因に前月増加のあと再び減少するなど引続き抑制気味に推移している。

この間製品在庫の動きをみると、形鋼、コンクリート製品など建設財が増加したものの、消費財がカラーテレビ、小型自動車、カメラ、繊維2次製品などを中心に減少を示したほか、生産財も緩

やかながら減少を続けた。

国内最終需要の動向をみると、9月の公共事業契約額(前年比)は+13.2%と高水準を維持し、上期の契約進捗率は76.0%と当初目標(73%)、前年実績(75.1%)をともに上回った。また10月の公共事業請負額(前年比)も+26.9%と順調な伸びを続けている(前月+24.1%)。

設備投資動向をみると、9月の機械受注額(船舶を除く民需)は、前月大幅増加(+31.7%)のあと、電力の反動減や鉄鋼、化学の減少などから-13.1%と4か月ぶりに減少したが、7~9月としては前四半期比+22.9%とかなり高い伸びを示した。

消費面では、9月の全国百貨店売上高(百貨店協会調べ、前年比)は秋冷の影響もあって秋物衣料が好調な出足を示したほか、家具等の売行きも順調に推移したため+6.7%と前月伸び悩み(+2.8%)のあと再び増勢を高めた。10月に入ってから都内百貨店の売上は順調な伸びを続けている模様である。耐久消費財の売行きをみると、10月の新車登録台数(速報、前年比)は+15.2%と高水準を維持し、家電製品も温風暖房機などが好売行きを示している。

雇用情勢をみると、有効求人倍率(9月)は0.58倍と5月(0.53倍)を底に緩やかながら改善を続けているが、常用雇用(全産業)は、前月横ばいのあと-0.2%と再び減少し、完全失業率も2.42%と前月(2.34%)比上昇した。

#### 物価は鎮静傾向を持続

10月の商品市況をみると、石油製品、化学製品などが輸入原材料コストの低下を映じてかなり大幅な軟化を示したが、高炉製品、天然糸(綿糸、そ毛糸)など主力商品が生産抑制の持続を背景に

回復を示し、非鉄(鉛、亜鉛)も海外市況上伸から強含むなど全般に底固い動きとなった。

卸売物価は、9月に-0.1%の下落を示したあと、10月に入っても上旬-0.2%、中旬-0.1%と引続き低下した。品目別には非鉄金属が海外市況高の影響から上昇したが、電力、ガス料金が円高差益還元による値下げから低下したほか、石油製品、化学製品も前月に続き下落した。

10月の消費者物価(東京、速報)は、秋物野菜の出回り増から季節商品の値動きが落ち着いていたうえ、電力、ガス料金引下げによる光熱費の低下が響いて+0.1%と小幅上昇にとどまり、前年比上年率も+4.0%と前月(+4.4%)に比べ低下した。

#### 銀行券の伸びはやや高まる

10月の金融市場をみると、銀行券が214億円の小幅発行超(前年同928億円)となる一方、財政資金は社会保障費、公共事業関係費の支出増にもかかわらず国債発行額が前年をかなり上回ったため760億円の払超(前年同3,269億円)にとどまり、この結果月中資金不足は271億円の小幅不足(前年、余剰2,263億円)となった。こうした中でコールレート(無条件物)は月中小刻みな変動を示したが、月末時点では前月末と同水準となり、手形レートも通月横ばいで推移した。なお10月6日以降、短期金融市場取引の弾力化措置の一環としてコール市場に7日物取引が発足した。

10月の銀行券平均発行高(前年比)は、+11.2%と前月(+10.4%)を上回り、最近の動きをならしめてみても個人消費の回復等を背景に徐々ながら伸び率が上昇している。9月のマネーサプライ(M<sub>2</sub>平残、前年比)は+12.0%となり、7~9月中平残は対政府信用寄与度の上昇もあって+12.1%と前四半期(+11.8%)に比しやや伸びを高めた。

貸出金利の動向をみると、期末月を迎えた金融機関の貸出姿勢積極化を映じて9月の全国銀行貸出約定平均金利は $-0.048\%$ と低下を続け(月末水準 $6.078\%$ )、中小企業金融機関でも全国銀行を上回る低下となった。

公社債市場では10月新発国債の証券会社引受額が前月に続き大幅に削減されたことや農林系統等機関投資家筋が値ごろ感から買引合を活発化したことが響き、市況は9月末ごろから持直し傾向を示した。株式市況は月央以降急上昇を示し、下旬には既往最高を更新した(月末東証指数 438.18)。

#### 輸出は特殊要因もあって増加

9月の輸出(通関、ドルベース)は、 $+6.0\%$ と前月( $+7.2\%$ )に続き増加した。これは、船舶がキャンセル船、中古船の転売等から、鉄鋼が中国向け船積みの集中等から、それぞれかなりの増加となったほか、弱電製品も一時的要因から増加を示したことなどによるものである。この結果、9月の輸出は数量ベースで前年を上回ったが、7～9月通計では前年同期比 $-3.8\%$ となっている。

他方9月の輸入(通関、ドルベース)をみると、原油が3か月連続の増加を示したが、反面、機械・機器が前月大幅増加のあと反動減となったため、 $+1.5\%$ と増勢が鈍化した(前月 $+11.1\%$ )。しかし7～9月の輸入数量は、前年同期比 $+7.4\%$ と製品輸入の増加を中心に増勢が続いている。

9月の国際収支は上記輸出入の動向を映じて貿易収支・経常収支(季節調整後)とも黒字幅がやや拡大したが、長期資本収支が前月を上回る大幅流出超となったため、総合収支では446百万ドルと小幅の黒字(前月、同346百万ドル)となった。なお7～9月中経常収支黒字(貿易収支季節調整後)は月平均1,492百万ドルと4～6月中1,614百万ドルに比し縮小している。

10月のインターバンク米ドル直物相場は海外市場でのドル安基調を映じて再び円高傾向をたどり、既往最高の円高で越月したが(月末176円05銭)、更月後米国のドル防衛策が発表されたことから反発を示した(9日186円70銭)。

(昭和53年11月10日)